高田松原地区震災復興祈念公園構想会議(第1回)を開催しました

都市計画課

岩手県東日本大震災津波復興計画復興実施計画では、東日本大震災津波の記憶を未来へ語り継ぎ、故郷への思いを継承するメモリアル公園等の拠点施設の整備を掲げています。東日本一帯に壊滅的被害をもたらした今次津波においては、鎮魂と追悼に加え、津波防災の文化を国内外に発信していくことが必要不可欠です。県では、平成23年12月以降、陸前高田市の高田松原地区を候補地として、**国営によるメモリアル公園の整備を国に提言**してきたところです。

国家的な事業としてメモリアル公園を実現するためには、地元の熱意とともに、本県独自の具体的な提案を行っていくことが必要と考え、**有識者と陸前高田市の市民代表による「高田松原地区震災復興祈念公園構想会議」を設置**しました。今後、この構想会議を軸にしながら、民間・NPO等との連携も含め、国営公園の実現に向けて検討し、国に働きかけていくこととしています。

＜第1回会議(平成24年7月3日)の様子＞

■委員の構成(五十音順)　◎:座長

＜有識者＞

池邊　このみ	千葉大学大学院教授
牛山　素行	静岡大学防災総合センター副センター長･准教授
◎中井　検裕	東京工業大学大学院　教授
内藤　廣	東京大学　名誉教授
本多　文人	陸前高田市立博物館長

＜地元代表者＞

伊藤　明彦	陸前高田市議会議長
佐々木　美代子	陸前高田市地域女性団体協議会会長
高橋　勇樹	陸前高田青年会議所前理事長
中井　力	陸前高田商工会事務局長

■事務局

- 陸前田高田市建設部都市計画課
- 岩手県県土整備部都市計画課、河川課
- 岩手県農林水産部森林保全課

■ 委員会における論点と主な意見

【論点 1】 津波防災文化の醸成と継承

○地元代表

- 子供たちの防災教育の観点から「命の尊さ」をコンセプトとし、人工的な手を加えないエリア（サンクチュアリ）を設け、自然の再生力を見せる場をつくることが重要。
- 津波災害の事実と精神的ダメージを手記として記録に残す取組みを行っているが、これを保存し津波防災文化として伝えていくことは絶対必要。

○有識者

- 明治や昭和の津波の記録が数多く残されているにもかかわらず、今回も大きな犠牲が発生した。災害の歴史の風化、災害の記録の風化が災害を生んでいる。この経験を伝えていくことは、生き残った我々の責務。
- 陸前高田がこれまで継承してきたものこそが津波文化であり、松原だけでなく高田の後背地域が刻んできた文化を反映した公園とすべき。
- 災害と積極的に向き合う視点も必要で、公園利用者の避難のあり方についても議論が必要。
- 綺麗な公園が整備され、松原が再生されると、何事もなかったように見えてしまう。そこをどのように超えるかが課題。防災文化を風化させないことに尽きる。

【論点 2】 陸前高田における震災復興祈念公園の意義

○地元代表

- 生活の一部となっていた高田松原を失うことは自宅を失う以上のショックだった。自然環境や景観に配慮して再生することは、市民の悲願。
- 市民にとって高田松原再生の思いは一致している。市民の心の支えとなっている一本松の子孫を残し、子供たちが育て、見守ることにより、「命をつなぐ」ということを伝えることができる。

○有識者

- 陸前高田は、市街地の人口の 30%の方が亡くなり、他に例の無い壊滅的被害を受けている。国営の祈念公園の設置にあたっては、このことに向き合い、明確にすることが必要。
- 技術立国日本として、松原再生の先端技術を世界に示す場として位置づけることも必要。
- 防災に関わる人材の育成は急務。国も関わりながら公園エリアを防災研究のフィールドとして活用し、陸前高田に研究施設や研修施設を誘致することもできるのではないか。地域経済にもプラスの効果をもたらす。
- この区域は、管理や整備の主体が重層的で複雑。管理の仕組みなどについても、これまでの縦割りではなく、新しい方法が必要ということを議論し、あり方として示していくことも必要。
- 文化というソフトなものと実際の空間である公園をどのようにつないでいくか。様々な動きや試みをうまく束ねて国営公園の提言としてまとめることが重要。　＜以上＞

第 2 回会議は、市民フォーラム形式での開催(9/2(日)@陸前高田市)を予定しています